
ミスティ・ローラ 十六夜アキに大人の恋愛感を教授する

機甲竜騎兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミステイ・ローラ 十六夜アキに大人の恋愛感を教授する

【Nコード】

N6416U

【作者名】

機甲竜騎兵

【あらすじ】

ミステイ・ローラ――。

かつて彼女はダークシグナーとなり、シグナーである十六夜アキと戦った。そのデュエル中に彼女への誤解は解け、和解した。

それから数年後。ミステイはアキが勤務する病院に訪れ、久しぶりの再会をする。

ランチを共にしながら昔の話をしていると、遊星の話で慌てるアキ。その反応に、ミステイは何かを思いつき――。

遊戯王5D's 完結記念小説第三弾！

前編（前書き）

「前回の予告でミステイがアキをさん付けで呼んでいたな。あれは間違いだ」

「作者！（資料集めのために）観直してたんじゃ？」

「残念だったなあ、感動で画面が観れなかったよ！」

「来いよ作者！ペンなんて捨ててかかって来い！」

でも一応一度だけアキのことをさん付けで呼んだので、この小説ではさん付けで統一してます。

前編

「はい。おしまい。よくがんばったわね」

そう言って私は診察を受けに来た女の子の頭を軽く撫でてあげる。女の子はあっさりと終わった診察が意外だったのか、少し涙目の顔でキョトンとしている。

この子はちょっとした風邪で来院し、私が診察をしていた。

「ほんとうにおしまい……？」

「ええ。あとはお薬を飲んで寝てれば治るわ」

『お薬』という言葉に女の子は少しイヤそうな顔をしたが、

「大丈夫よ。全然痛くなかったでしょう？」

私が微笑みながらそう言っていると、女の子は満面の笑顔で頷いた。

「ありがとう、アキせんせい！」

女の子は大きく手を振りながらそう言い、母親に連れられて診察室を出た。私も診察室の扉が閉められるまで手を振り続ける。

その子が出たあと、診察室の壁に取りつけられた時計を見る。針はそろそろ正午を指す手前だった。

「もうすぐお昼休みね」

そう呟いてカルテを纏める。午前の診察はあの子で最後だろう。

片づけをしていると、待合室の方が少し騒がしくなって来た。何ごとかとは思ったが、そのまま片づけを続ける。

そうしていると診察室のドアが叩かれた。午前はもうないと思っていたが、ひとまず返事をする。

扉を開けて入って来たのは、なんと――。

「ミステイ！」

そう、あのミステイ・ローラだった。意外な人物の来訪に、私は

思わず立ち上がる。

「久しぶりね。アキさん」

そう言いながらミスティは歩いてくる。それに対し、私も軽く挨拶をした。

白を基調とした服を着ているミスティの後ろを見ると、来院者やナース達が羨望の眼差しでミスティを見ている。ミスティは今でも世界的なトップモデルなので、当然といえば当然だろう。さつき騒がしくなったのはミスティが現れたからね。

「それにしても、どうしてここに？ どこか具合が悪いの？」

「いいえ。この病院にあなたがいるって聞いてね。久しぶりに会いたくなっただのよ」

そう言っただけミスティは笑った。たしかに、最近はお互い忙しくて文通もメールのやり取りも滞っていたわね。

「ところで、今時間あるかしら？一緒にランチでも」

「ええ。もうすぐお昼休みだから、少し待ってて」

私がそう言っただけミスティは了承し、ロビーで待っていると告げて診察室を出る。少し早いけど、私も急いで準備をする。

白衣を脱いでロビーにいくと、一箇所に人ばかりができていた。間違いなく、そこにミスティがいるのだろう。

人だかりのせいでお互いが見えないためどうやって連絡しようと思ったが、携帯にミスティのメールアドレスが入っていることを思い出し、一旦外に出て簡単な短文を送った。

するとミスティは取り囲んでいるファンにやんわりと断りを入れながら現れ、私と共にミスティが運転するオープンカーに乗ってその場を去る。

「ごめんなさいね。騒がしくしちゃって」

運転しながらミスティは言った。

「うっん。私の方こそ待たせてごめんなさい」

私がそう言うと、ミスティは微笑みながら、

「いいのよ。突然来た私が悪いのだし」

と言った。

私は運転するミスティの横顔を見る。長い黒髪が風になびき、とても凛々しく美しい。

「ん？ 何？」

私の視線に気づき、ミスティは横目使いに私を見る。私は少し気恥ずかしくなり、適当に誤魔化して視線を逸らした。

だけどミスティはそんな私の気持ちも見抜いてるかのように小さく笑い、運転を続ける。

私は顔にかかる前髪を横にいなしながら、昔を思い出した。

—— 思えば、ミスティと出会ってから—— ダークシグナーとの戦いから、もう何年も経っている。

ミスティはダークシグナーになっていた頃の記憶をぼんやりとだけ覚えていて、自分がして来た罪に苛まれ自殺しようと思っていた時期もあった。

だけど私はそんなミスティを咎め、こう言った。

「あなたが弟のトビーを愛したように、世界中の人々があなたを愛している。あなたがいなくなったら、その人達があなたと同じ思いをすることになるのよ」

そう言うと、ミスティはトビーが死んだ頃の自分を思い出したの

か、悲しそうな顔をした。

「生きることが罪にはならない。死ぬことが償いにはならない。でも、生きること、自分がして来たことへの償いにはなる」

私自身にも言い聞かせるようにそう言うと、ミスティは涙を流しながら謝り、『ありがとう』と言ってくれた。

——そんなことを思い出しながら流れていく街の景色を眺めると、ミスティが予約しておいたレストランに着いた。さすがというべきか、高級そうなレストランである。

ひとまずお互い紅茶を頼み、同じランチメニューを注文する。

「それにしても、ミスティはあの頃と変わらないわね。ずっと綺麗なままだわ」

運ばれて来た紅茶に舌鼓したつみしたあと私は言った。

「ありがとう。あなたも以前の可愛らしさよりも美しさの方が際立っているわよ」

ミスティも紅茶を口にしてそう言ってくれた。本当に綺麗なミスティに言われると、嬉しいと同時に恥ずかしい。

「——ありがとう。アキさん」

紅茶を置き、真剣な眼差しでミスティは言った。どういうことが分からず私が不思議な顔をしていると、

「あの時、あなたの言葉があったから、私は生き続けることができた。私はあなたに、二度助けられたのよ」

と言った。

「そんな……あれは、私自身のことでもあるし……。私も、私自身

がして来たことへの償いでしかない……」

恥ずかしさと後悔がない交ぜになりながら、私は下を向いて言った。波紋に揺らぐ紅茶に、かつて“魔女”と呼ばれた自分が映ったように見えた。

「それでもいいの。大切なのは理由じゃない。そう思いながら、ちゃんと実行して、ちゃんと人を救うことができる……。私は、本当の意味で、トビーの弔いができたと思う。もう、あなたを魔女という人も、魔女と思う人もいないわ」

ミステイの言葉に、私は目に溜まった涙を指で軽く拭い取った。そしてミステイを真っ直ぐ見て、

「ありがとう。ミステイ」

とまだ少し涙ぐみながらも言った。紅茶の中に、もう魔女だった頃の自分は見えない。

「ところで、彼とはうまくやってる？」

「え？」

突然の質問に思わず素で返す。ミステイは指を組み、興味津々な顔で私を見ている。

「あら？ 彼——不動遊星とつき合ってるのでしょ？」

真顔で言われたその一言に、私は少し吹き出した。

「べ、別に遊星とはつき合うとかそういう仲じゃなくて……単にチーム・5D'sの仲間であって、チームメイトであって……」

少し早口になりながら言った私の言葉に、ミステイは——こう言っただけ、獲物を見つけた蛇のように——ニヤリと一瞬笑った。

「ねえアキさん。今夜空いてる？」

いつもの顔になり、少し身を乗り出してミステイは言った。

「え？ ええ。今夜は宿直じゃないし、明日は非番だけど……」

突然変えられた質問に不思議な顔をしながらもそう答えると、ミスティはニコツと笑い、

「じゃあ、久しぶりにデュエルでもしない？」

と言つて来た。

「デュエル……」

その言葉に、私は少し考える。たしかに、ここ最近は忙しくてデュエルどころかカードにも触っていない。

ミスティが何か企んでいるような気がしなくてもないけど、

「ええ。デュエルしましょう」

と答える。するとミスティは小さく微笑み、カバンの中から名刺のような紙とペンを取り出し、その紙に何かを書いていく。

「はい。私が泊まっているホテルの住所。私の名前を書いておいたから、フロントに見せれば通してくれるはずよ」

そう言つて手渡された紙は、ホテルの名前と住所が書かれた案内カードだった。その紙に、『親愛なる十六夜アキへ ミスティ・ローラ』とミスティが今しがた書いた文字が入っている。

「好きな時間に来て構わないわ。私も明日は休みだから、ワインでも飲めましょう」

「え……ええ。分かったわ」

ワインという言葉に少し戸惑いながらも、私はそう言つてその紙をハンドバッグへ入れる。

ちょうどその時、注文していたメニューが届き、私達はそれを堪能した。

食事のあと、午後の診察があるため私はミスティの車で病院まで送ってもらい、一旦そこで別れる。

病院に着くと、ナースや子供の親御さん達からミスティとの関係

についての質問攻めだった。

その夜、当直が終わり、私はデュエルディスクが入ったバッグを持ち、赤いドレスを着てミスティが泊まっているホテルへタクシーで来た。当たり前だけど、この街でも一、二を争う高級ホテルだ。

一応、それなりの格好をして来たけど、着慣れていないため少し恥ずかしい。WRGP開催記念祝賀会でもドレスを着たけど、あの時はライディング・デュエルのことで頭がいっぱいだったため、そんなことを考える余裕はなかった。

フロントにミスティから渡された紙を見せると、ちゃんと話しをしてくれてたためすんなりと部屋の番号を教えてくれた。なんと最上階の一番高い部屋だ。

エレベーターに乗って昇っていくと、だんだん緊張してくる。昼間は普通に話していたが、考えてみれば相手は世界的なスター。緊張しない方がおかしい。

エレベーターの扉が開くと、絢爛豪華に彩られた廊下が目の前に現れる。私は一度大きく深呼吸をして、教えられたミスティの部屋へと歩いていく。

ミスティの部屋の前に来て、もう一度深呼吸をする。そしてドアをコンコンと二回叩くと、中からミスティの声と、ドアに近づいてくる足音が聞こえて来た。

「いらつしゃい。待っていたわ」

ミスティはドアを開けてそう言うとお優しく微笑む。

「さ、入って」

ミスティに言われ、私は『お邪魔します』と一言言っただけで部屋に入

った。部屋に入ると大きなシャンデリアが照らす応接室に通された。シヤンデリアの下には高そうなテーブルとイスが置かれ、庶民にはまるで別世界だ。

そして一枚の大きなガラスが張られた窓からは、街全体を眺望ちやうほうできるかと思うほどの夜景が広がっている。

「わあ……綺麗な所ね」

私が素直な感想を口にする、銀製のトレイに載せたワインと二つのグラスを持ったミスティはなぜか小さく笑った。その反応に不思議な顔をしていると、

「ごめんなさい。昔、ネオ童実野シティにいた時にも、あなたと同じことを言っただけの子がいたのよ」

とミスティは言った。

「同じことを？」

そう言いながら近づく私に、ミスティはイスに座るよう促す。私がイスに座ると、ミスティはその右向かいに座った。

そしてお互いの前に置かれたグラスに赤ワインを注ぎながら、

「カーリーよ」

と答える。

「カーリーが？」

「ええ。ネオ童実野シティにいる時、彼女も私の部屋に来たのよ」

そう言っただけでミスティはワインが入ったグラスを手取る。私は一瞬躊躇しながらもグラスを持ち、乾杯した。

「……」

ミスティが上品にワインを口にしたのを見ながら、私も意を決して軽く口にしたが、

「ケホッ！ ケホッ！」

やはり、少し咳き込んでしまった。

「あらあら、大丈夫？」

ミスティはグラスを置いて心配そうに私の背中をさすり、急いでダイニングに戻ってコップに水を入れて持って来てくれた。私はそれを受け取り、ゆっくりと飲む。

「もしかして……お酒、飲めないの？」

そう聞かれ、私は少し顔を下に向けて小さく頷く。

昔、まだサイコパワーに目覚めていない頃、パパとママの目を盗んで興味本位にワインを飲んで以来、飲めなくなってしまった。

しかし、せっかく出されたというのもあるし、私もミスティのような女性になってみたい、という思いから飲んでみたけど……結果的に、その考え自体がまだまだ子供ということを痛感させられた。

「無理しなくてよかったのに。待っててね。今紅茶を淹れてくるから」

そう言ってミスティはワインとグラスを持って再びダイニングへ戻る。私は咳は止まったが、激しい後悔と共に顔が真っ赤になっているのが自分でも分かる。

少ししてミスティが紅茶が入っているだろうティーポットとカップを持って来たが、恥ずかしくて目を合わせることができなかった。ミスティはそんな私のことを知ってか知らずか、何も言わずにカップに紅茶を注ぎ、受け皿ソーサーに乗せて私の前に置いてくれる。

私は左手で受け皿ソーサーを、右手でカップを持って一口飲むと、その香りと口の中に広がる味でだいぶ落ち着けた。

改めてミスティを見てみると、そんな私をニッコリと見ている。私も照れながらも笑い返した。

「さて、そろそろ始めようかしら」

そう言ってミステイは立ち上がり、応接室にある棚から煌びやかなデュエルディスクを取り出した。それを見て、私も当初の予定を思い出し、バッグから慌てて赤いデュエルディスクを取り出す。

ミステイは夜景が一望できる窓際に立ち、私もその前に立つ。そして同時にデュエルディスクを起動し、構える。

「デュエル！」

「デュエル！」

デュエルディスクが自動的に先攻を決める。先攻は——ミステイだ。

「私の先攻ね。ドロー！」

ミステイ・ローラ

ライフ：4000

手札：6枚

モンスター：なし

魔法・罠：^{トラップ}なし

十六夜アキ

ライフ：4000

手札：5枚

モンスター：^{トラップ}なし

魔法・罠：^{トラップ}なし

「私はモンスターを守備表示。ターンエンド」

ミステイの前に横向きにセットされたモンスターのカードが現れ

る。裏側なので、その正体は分からない。

「さあアキさん。相手は何もしてこないわよ。恋に対するあなたの姿勢はどうなのかしら？」

突然ミスティにそう言われ、

「こ、これはデュエルでしょ。私のターン！」

あまりの不意打ちに、私は慌ててカードをドローする。

ミスティ・ローラ

ライフ：4000

手札：5枚

モンスター：裏側守備モンスター

魔法・罠：^{トラップ}なし

十六夜アキ

ライフ：4000

手札：6枚

モンスター：^{トラップ}なし

魔法・罠：^{トラップ}なし

ミスティのフィールドに伏せカードはない。ここは攻める！

……別にミスティの質問に対する答えじゃない、と軽く頭を振りながら自分に言い聞かせ、手札のカードを1枚手に取る。

「私はローズ・ウィッチを召喚」

薔薇の帽子と赤と緑のタイトのような服を着て、左の袖から鞭のイバラような棘を出した女性が現れる。

「ローズ・ウィッチで守備モンスターを攻撃！ “ローズ・ウィッチ”！」

鞭のような棘を^{イバラ}しならせ、ローズ・ウィッチは攻撃する。

「いいわ。恋は攻めるのも大事よ。でも——」

そう言ってミスティはセットしていた守備モンスターを表側にし、
「私が守備表示にしていたのはレプティレス・ナージャ。このモンスターは戦闘によつては破壊されないわ」

ミスティの目の前に現れた下半身が蛇の少女がローズ・ウィッチの攻撃をバリアーのようなもので防ぎ、跳ね返す。

「ダメよ、アキさん。相手の気持ちを考えずにただ攻めるだけでは拒絶されてしまうわ」

右手の人差し指を軽く振りながらミスティは言った。その言葉に、私は少し納得したような、できないような気持ちになる。

「さらにこのバトルフェイズ終了時、レプティレス・ナージャの効果発動！ レプティレス・ナージャと戦闘を行ったモンスターは、そのバトルフェイズ終了時に攻撃力が0となる！」

「なっ……！」

ミスティが私のローズ・ウィッチを指差して言うと、ナージャは相手を驚かせるように両手を目いっぱい広げ、ローズ・ウィッチと目を合わせる。するとローズ・ウィッチの体が徐々に右へと変わっていき、攻撃力が0になってしまった。

「ね？ ただ攻めるだけでは、弾かれるだけじゃなく手痛い反撃を受ける時もあるのよ」

「だ、だからこれはデュエルでしょう！」

「ええ。デュエルの話よ」

私が必死で言った一言に、ミスティはニッコリと笑って返した。
たしかに、今の言葉に恋とか恋愛とかの単語はなかったけど……！

私は一度頭を横に振って息を吐き、落ち着きを取り戻そうとする。そう、今はデュエル中。ミスティの言葉に惑わされることなく、状

況を確認しないと。

私のフィールドには攻撃力が0になったローズ・ウィッチが1体のみ。このままターンエンドするわけにはいかない。

「私はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

伏せたカードは罨カード^{トラップ}『棘の壁^{ソーン・ウォール}』。植物族モンスターが攻撃対象に選択された時、相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊する罨カード^{トラップ}。これで護りを固める。

「私のターン！」

ミステイ・ローラ

ライフ：4000

手札：6枚

モンスター：レプティレス・ナージャ（守備）

魔法・罨^{トラップ}：なし

十六夜アキ

ライフ：4000

手札：4枚

モンスター：ローズ・ウィッチ（攻撃）

魔法・罨^{トラップ}：伏せカード1枚

「フフッ……このカードは、自分、または相手フィールド上から攻撃力が0のモンスターを2体リリースした場合のみ、手札から特殊召喚できる！ 私は攻撃力が0のレプティレス・ナージャと、あなたのフィールドにいる攻撃力が0となったローズ・ウィッチの2体をリリースし、レプティレス・ヴァースキを特殊召喚！」

ミステイのフィールドにいたナージャと共に私のフィールドの石化したローズ・ウィッチが光の玉となって合わさると、その中から

下半身が蛇で四つの腕を持つ女性が現れた。その手には一輪の蓮のような花を持っている。

「そんな……相手フィールド上のモンスターをリリースして特殊召喚されるモンスターなんて……！」

ヴァースキの思いもよらぬ特殊召喚方法に、私は驚いた。

「恋もデュエルも、意外な所から強敵が出てくる時があるのよ」

右手の人差し指を立てて言ったミスティの言葉に、私は一瞬シェリーの顔が浮かび、少し視線を下げる。

「あら？ 思い当たる人がいるの？」

「え？ うっん。なんでもない」

首を振って慌てて否定した私の言葉に、ミスティは何か思いついたような顔をする。

「じゃあ、私が恋の強敵になりましたようか？」

「ッ……ミスティ！」

面白そうに言ったミスティの言葉に、私は少し本気に怒った。

「フフッ、冗談よ」

直後にミスティは含み笑いをしながらそう言った。分かっていたはずなのに、少し焦った自分が恥ずかしい。

「じゃあ、デュエルの続きよ。レプティレス・ヴァースキで、アキさんにダイレクトアタック！」

ミスティの攻撃宣言を受けたヴァースキはその手に持つ蓮の花に軽く息を吹きかけると、蓮の花は石化した。そしてもう一度息を吹きかけると、石化した蓮の花びらが私に襲いかかってくる。

マズイ……！ 私が伏せている『棘の壁』ソーン・ウォールは植物族モンスターが攻撃対象に選択されないと発動できない……！

十六夜アキ

ライフ：4000 - 2600 〓 1400

ヴァースキの攻撃が終わったあと、私はミステイを少し睨んだ。

「私は最後にカードを2枚伏せて、ターンエンドよ」

ミステイとヴァースキの間に、2枚の伏せカードが現れる。

強い……！ あの時よりも、遥かに強い……！

でも……なぜだろう、このモヤモヤした気持ちは。いろいろ言われて、少しイライラしているのかもしれない。

そんな気持ちを抱きながらも、私はデッキに手を伸ばす。

前編（後書き）

最近（でもないけど）思うことがある。

絵を描きたい！ いや、正確には上手に描きたい！

絵が描けたら小説の表現方法が大幅に上がると思うんだよね。でも小学校低学年どころか幼稚園児以下の絵しか描けない自分では無理な話です。

それにしても『古代龍の咆哮』の外伝以来の一人称でしたが、やっぱり苦手だ。自分にはやっぱり三人称が合ってるんだと思う。

よく一話の内に一人称の視点がコロコロ変わる小説がありますが、コロコロ変えるぐらいなら最初から三人称で書けばいいんじゃないの、と思う。

ちなみに遊戯王5D'sの最終回で医者になっている未来のアキが少し出ましたが、なんでもあれば八年後の姿らしいです（監督のツイート情報）。

で、ラストデュエル終了後に『臨床腫瘍』とか書かれた医学書のカバンにしまうアキの姿があったし、ナースが結構深刻そうにアキのもとにいくシーンもありましたが明確な部署は分らず。

とりあえず、この小説ではアキは少児科勤務ということで。時間軸的にはアニメで出た未来よりも前の話という設定なので。

次回予告

アキ「ミステイとの久しぶりのデュエルで翻弄される私。

どうしてミステイはあんなことを言ってくるのか……単にからかっているだけ？

少しイライラしながらも、ミステイの言葉に私は少しずつ自分の気持ちと向き合っていく。

次回『ミステイ・ローラ 十六夜アキに大人の恋愛感を教授する
後編』

後編（前書き）

そういえば前回言い忘れましたが、この小説の主人公はあくまでミスティです。一人称はアキだけどミスティです。

後編

「私のターン！」

ミステイ・ローラ

ライフ：4000

手札：3枚

モンスター：レプティレス・ヴァースキ（攻撃）

魔法・罾^{トラップ}：伏せカード2枚

十六夜アキ

ライフ：1400

手札：5枚

モンスター：なし

魔法・罾^{トラップ}：伏せカード1枚

手札を見ながらも、私の脳裏に先程からのミステイの言葉が再生される。思い出さないように、気にしないようにするが、少しイライラしてくる。

「私はチューナーモンスター、^{ナイトローズナイト}夜薔薇の騎士を召喚」

身の丈にあつた剣と漆黒の鎧を着た少年が現れ、紫電を走らせながらマントを^{ひるがえ}翻す。

「夜薔薇の騎士の効果発動！ このカードの召喚に成功した時、手札からレベル4以下の植物族モンスター1体を特殊召喚できる！」

私はレベル4の^{リバイバル・ローズ}返り咲く薔薇の大輪を特殊召喚！」

^{ナイトローズナイト}夜薔薇の騎士が剣を振るって空間を裂くと、その中から中心に目のような青い水晶がついた三輪の薔薇が現れる。

「レベル4の^{リバイバル・ローズ}返り咲く薔薇の大輪に、レベル3の^{ナイトローズナイト}夜薔薇の騎士をチ
ューニング！」

2体の^{リバイバル・ローズ}モンスターが飛び上がり、三つの光の輪となった^{ナイトローズ}夜薔薇の
騎士が返り咲く薔薇の大輪を包む。

「冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の花よ、開け！ シンク
口召喚！ 現れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン！」

眩い光の中から真紅の薔薇の翼を持つドラゴンが現れ、猛々しい
咆哮を上げる。

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果発動！ このカードのシンク
口召喚に成功した時、フィールド上のカードを全て破壊することが
できる！ “ブラック・ローズ・ガイル”！」

私が右手を前に出して言うと、ブラック・ローズ・ドラゴンは再
び^ほ咆える。すると吹き荒れる風と共に黒い薔薇の花びらが舞い、フ
ィールド全体を覆い尽くす。

ミステイは右腕で頭をガードしながら、

「クッ……その効果は防げないけど、ブラック・ローズ・ドラゴン
にはご退場願いましょうか。^{トラップ}罠発動！ 『奈落の落とし穴』！ 攻
撃力1500以上のモンスターが召喚、反転召喚、特殊召喚された
時、そのモンスターを破壊してゲームから除外する！」

と言つてカードを発動すると、ブラック・ローズ・ドラゴンの真
下に黒い穴が開く。その穴から不気味な腕が無数に伸び、暴れるブ
ラック・ローズ・ドラゴンを穴に引きずり込んだ。

だけどブラック・ローズ・ドラゴンが巻き起こした風は止まらず、
私が伏せていた『^{ソーン・ウォール}棘の壁』と、ミステイのフィールドのヴァースキ
と伏せていた『聖なるバリア ミラーフォース』を破壊する。

ミステイは風が吹き止むと、

「ダメよ、アキさん。恋愛では向きになって心にもない言動をする

と自分も相手も傷つけることになるわよ」

と子供を戒めるように言った。その言葉に、私は少し思い当たる節があったので押し黙る。

この4ターンで分かった……。ミステイはこのデュエルのあらゆる行動を恋愛と結びつけるつもりだ。私をからかうつもりなのかは分からないけれど……。

「私はさらに魔法カード『デュエルサモン二重召喚』を発動！ このターン、私は通常召喚を二回まで行うことができる！ その効果で、私はボタニカル・ライオを召喚！」

植物の根のような足を持ち、牡丹の花の鬘たてがみをしたライオンが駆けながら現れる。ボタニカル・ライオの召喚に、ミステイは少し驚いた様子だった。

「ボタニカル・ライオの攻撃力は、自分フィールド上の植物族モンスター1体につき300ポイントアップする。ボタニカル・ライオ自身も植物族だから、攻撃力は1900！」

ボタニカル・ライオが唸ると、その体をオーラが包み攻撃力がアップする。

「ボタニカル・ライオで、ミステイにダイレクトアタック！」

私がミステイを指差して言うのと、ボタニカル・ライオはミステイに向けて駆け出し、体当たりした。

ミステイ・ローラ

ライフ：4000 - 1900 = 2100

ボタニカル・ライオの攻撃を受けたミステイは少したじろぎながらも、

「さすがね。アキさん」

と言いながら体勢を立て直す。

「私は最後にカードを1枚伏せて、ターンエンド」
「私のターン！」

ミステイ・ローラ

ライフ：2100

手札：4枚

モンスター：なし

魔法・罠：^{トラップ}なし

十六夜アキ

ライフ：1400

手札：0枚

モンスター：ボタニカル・ライオ（攻撃）

魔法・罠：^{トラップ}伏せカード1枚

「私は魔法カード『ヴァイパー・リボーン』を発動！ 自分の墓地に存在するモンスターが爬虫類族のみの場合、自分の墓地からチューナー以外のモンスター1体を選択して発動！ そのモンスターを自分のフィールドに特殊召喚する！ 私の墓地には爬虫類族のレプティレス・ナージャとレプティレス・ヴァースキがいる。レプティレス・ヴァースキは自身の効果以外では特殊召喚できないから、私はレプティレス・ナージャを特殊召喚！」

再びミステイのフィールドに蛇の下半身を持つ少女、ナージャがバアーと両手を広げながら現れた。

「ただし、この効果で特殊召喚されたモンスターは、このターンのエンドフェイズに破壊されるわ。私はレプティレス・ナージャをリ

リリースし、レプティレス・メデューサをアドバンス召喚！」

ナージャが光の玉になり、その中から下半身が蛇で恰幅の広い女性が現れる。

「レプティレス・メデューサの効果発動！ 手札を1枚墓地へ送ることで、相手フィールド上表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力は0となり、プレイヤーの意思での表示形式の変更を不能とする！」

「なっ……！！」

トラップ

「私は手札の永續罫『スネーク・チョーク』を墓地へ送り、ボタニカル・ライオの攻撃力を0にし、表示形式の変更を不能にする！」

ミステイが手札を1枚墓地へ送ると、メデューサは目を大きく見開き、私のボタニカル・ライオを睨みつける。メデューサと目が合ったボタニカル・ライオは少し怯えたかと思うと、瞬く間に石化した。

「アキさん。その攻撃力が0となったボタニカル・ライオは、心の壁がなくなったあなた自身よ。その姿にあなたは何を見るの？」

そう言われ、私はハツとする。

心の壁がなくなった私自身……たしかに、昔の私は他人と距離を置くため、拒絶するために心に壁を作っていた。いえ、心を閉ざしていたといえる。

そんな壁を取り払い、心を開かせてくれたのは……遊星のお陰。遊星が、私の本当の居場所を思い出させてくれたお陰。

だから、私はみんなと一緒に戦えることができた。攻撃力0というのは、たしかに、今の私なのかもしれない。

「さあ、アキさん。心の壁がなくなったあなたに対して、相手がアタックしてくるわよ。あなたはそれにどう答えるの？」レプティレス・メデューサで、ボタニカル・ライオを攻撃！ “あくしき悪食の毒牙”

！

ミスティがボタニカル・ライオを指差して言うと、メデューサがその巨体を這わせ、大口を開けた迫ってくる。

心の壁がなくなった私なら、他人を受け入れることができる。だけれど――。

「^{トラップ}罠発動！ 『和睦の使者』！ このターン、私のモンスターは戦闘によっては破壊されず、私が受ける戦闘ダメージは全て0となる！」

石化したボタニカル・ライオに迫りくるメデューサの巨体を、その前に現れたバリアーが防ぎ、弾き返す。私が^{トラップ}罠カードを発動したことに、ミスティは少し驚いている様子だった。

「あら、拒絶するの？」

意外といった顔で、それでいて私の返事を楽しみにしているような表情でミスティは言った。

「ミスティ……たしかにあなたは、私の親友よ。お互いに気心の知った仲だと思う。でも――」

私はそこで一度言葉を切り、まぶたを閉じる。その裏に私の思い人の顔を浮かべたあと、まぶたを開けてまっすぐにミスティを見た。

「私の心の全てをさらけ出すのは、今のところ一人だけ」

そう言うと、ミスティは納得したように、安心したように小さく笑い、

「ターンエンドよ」

と宣言する。

「私のターン！」

もう、モヤモヤした気持ちも、イライラした気持ちもない。いっなくなっスッキリした気持ちで、カードをドローする。

ミステイ・ローラ

ライフ：2100

手札：1枚

モンスター：レプティレス・メデューサ（攻撃）

魔法・罾：^{トラップ}なし

十六夜アキ

ライフ：1400

手札：1枚

モンスター：ボタニカル・ライオ（攻撃）

魔法・罾：^{トラップ}なし

「私はチューナーモンスター、ウィードを召喚」

緑の雑草に顔と手足がついたような植物が現れる。

「レベル4のボタニカル・ライオに、レベル2のウィードをチューニング！」

二つの光の輪となったウィードが上にいくと、ボタニカル・ライオの石化が解け、その光の輪へと飛び込んでいく。

「聖なる森に潜みし華麗なる棘の狩人^{イバラ かりうと}よ。戒めの鞭を持ちて今こそ姿を現せ！ シンクロ召喚！ 現れる、スプレンドイド・ローズ！」

四つの棘の鞭^{イバラ}を持ち、半分に色分けされた服を着た女性が薔薇の花吹雪の中から現れる。

「攻撃力2200……相打ちを狙っているの？」

「いいえ。スプレンドイド・ローズの効果発動！ 1ターンに1度、自分の墓地の植物族モンスター1体をゲームから除外することで、相手フィールド上の表側表示モンスター1体の攻撃力を、エンドフェイズまで半分にする！」

「何ッ……？」

「私は墓地のウィードをゲームから除外し、レプティレス・メデューサの攻撃力を半分にする！」

スプレندیッド・ローズは腰の辺りから伸びる二つの棘イバラの鞭でメデューサを縛り上げ、その攻撃力を半減させる。

「スプレندیッド・ローズで、レプティレス・メデューサを攻撃！」

スプレندیッド・ローズは新たな棘イバラの鞭を手に取り、メデューサをその鞭で打つ。

ミステイ・ローラ

ライフ：2100 - 1100 = 1000

「クッ……やるわね、アキさん。でも、それがあなたの恋に対する答えなの？」

ミステイにそう言われても、私にもう迷いはない。答えは決まっている。

「ミステイ。たしかに私の思い人である遊星は、機械いじりが好きで、鈍感で、誰にでも優しくするけど……私は、私自身の気持ちを大切に、何度でもぶつかっていく」

私は右手を胸に当ててそう言った。

「そして、これがその答え！ スプレندیッド・ローズの効果発動！ このカードが攻撃したバトルフェイズ中に1度だけ、自分の墓地の植物族モンスター1体をゲームから除外することで、このカードの攻撃力を半分にしてもう一度攻撃できる！ 私は墓地のローズ・ウィッチをゲームから除外し、スプレندیッド・ローズの攻撃力を半分にして、ミステイにダイレクトアタック！」

スプレندیッド・ローズは跳び上がると、そのまま高速回転し

ながらミスティへ攻撃する。ミスティはその攻撃を潔く受けた。

ミスティ・ローラ

ライフ：1000 - 1100 = 0

「……見事だったわ。アキさん。それがあなたの答えであり、恋の姿勢なのね」

そう言いながらミスティは近づいて来て、私の前に立つ。

「私の方こそ、いろいろ言ってくれてありがとう。私も自分の気持ちともう一度向き合えたわ」

ネオ童実野シティを離れたあの日は、今の関係を壊したくなくて、遊星を縛りつけたくなって自分の気持ちは伝えなかつたけど、今なら言える気がする。

「フフツ。じゃあ自分の気持ちと向き合えた所で、早速彼に電話でもメールでもして伝えましょ」

「え！ いえ、まだ、その、時間带的にも迷惑になると思うし……」
突然のミスティの提案に、私は慌てて首を振った。やっぱりいざ伝えるとなると無理かもしれない……。

「女の子の恋に時間も距離も関係ないのよ。でも、私はデュエルで負けたし、今回は黙っておくわ。だけど、近い内にちゃんと伝えるのよ」

ミスティはそう言ってウィンクする。私は少しミスティを上目遣いに見て、赤面しながら小さく頷いた。

「さあ、新しい紅茶を淹れましょ。今夜は泊まっていきなさい」

そう言ってミスティはテーブルに戻る。私も笑顔でそのあとに続いた。

後編（後書き）

これにてミステイ編は完結です。もうちょっとラストの締めを凝りたかったけど、ガールズトークもコイバナも聞いたことがない自分にはこれが限界でした。

あと自分の流儀では、可能な限り手札は全て使い切るデュエルをしたいのですが、今回のミステイや前回のルドガーとかは使い切れてません。そこが悔やまれる……。

ミステイは多分相手をからかうことが好きだと思うんだ。からかうっていうと語弊があるけど、気兼ねなく話せるって感じかな。初対面のカーリーに『死相が見える』って言ったしね。

で、アキに対しては大人の余裕からこの小説のような接し方をするんじゃないかな〜という妄想。まあ、最終回の遊星とアキのうやむや〜な関係を自分なりに進展させたかったというのもあるけど。

次回予告

デイマク「私のターン！」

私は気がついたら、見知らぬ森の中にいた。いや、正確にはいたらしい。

見知らぬ町の、見知らぬ老人の家で介抱された私には、記憶がなかった。

だが、少しずつ思い出していく。そして語っていく。私がダークシグナーとなる前の記憶を……。

次回『デイマク 新たな門出』。待て、なぜ私のだけデュエルシーンがないのだ」

作者「答え、デイマクだから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6416u/>

ミスティ・ローラ 十六夜アキに大人の恋愛感を教授する

2011年7月11日03時19分発行